

みっちゃん物語



土庫病院友の会 ”笑顔“に掲載

《パート 1》

私の実家はふとんやでいつも人が出入りし、あまり人見知りしないのはそんな環境のせいでしょうか。昔は赤ちゃんを寝かすのに、幌蚊帳をかぶせて蚊が来るのを防いでいました。

母の話では 2 歳頃、お店に来たお客さんの話をジ〜っと聞いていた私は、急いで奥の部屋に行つてうんうん言いながら幌蚊帳をハイハイして引きずって持ってきたのでびっくりしたと母から聞かされました。よく人の話を聞いて自分ができることはないのか、いわゆるおせっかいは

このころからだったようです。

高校 2 年の春休み新聞に

「孤独死で 1 週間後に発見された」

ニュースに衝撃を受け、

なぜわからなかったのか、私の周りにも

知らないだけでそんな人がいるかもしれないと思い、翌日市役所に言って一人暮らしの高齢者について聞きに来ました。春休みヘルパーさんと一緒に老人家庭と一緒に回りました。途中で見つけた「つくし」をもっていくと、「何年ぶりか」と喜んでいただきました。また高齢のご夫婦は「みっちゃん」とかわいがってかわいがってくれ卒業まで通い続けました。



私が福祉の仕事をしようと思ったのは、これがきっかけです。日本福祉大学に入学したのは 1973 年、田中角栄内閣が福祉元年と言い出した時でした。



《パート 2》

大学の入学案内を見て父に部落問題研究会は入るなど言われました。友人が部落の出身と打ち明けられた時、もう昔の話と思っていた私は驚きました。なぜ隠すようなことなのかと思いました。部落問題研究会に入って4年間毎週地域に通ってボランティア。様々な困難が貧困によるものか差別によるものかがわかりませんでした。このまま差別はなくならないと思っていた時、部落は解放の方向に向かっているという共産党の人の話を聞きました。結婚、職業、居住は自由になっているというものでした。

それなら私でも何かできることがあると思い20歳で共産党に入って、お金があってもなくても命は平等と医療ソーシャルワーカーとして、「部落の女医」の舞台になった診療所のMSWとして誰も知らなかった奈良県に来たのは45年間前です。

診療所でも初めてのMSW。生活保護の申請をすると地域の民生委員からなぜ民生委員を通さないのかとお叱り。大学では生活に困った人は誰でも申請できる制度と習いました。

医師不足で経営困難、初めての給料は同じ民医連の仲間が集めてくれたカンパでした。

19床あったベッドを廃止した時、当時の婦長さんは、

「地域の道が病室の廊下やと思ってんねん。」と
自転車に往診かばん「おっちゃん元気か？」と
回る姿は地域医療の原点でした。

婦長さんは農村医療で有名な佐久病院から小林綾先生と一緒に来た人でした。



《パート 3》

はじめてのリストラ 「部落の女医」岩波新書 の舞台になった診療所で骨を埋める覚悟できた私でしたが、診療所の医師不足で経営が困難になり 10 月には土庫病院に出向し医療ソーシャルワーカーに。年間2000件くらいの相談を受けていました。当時奈良県の老人医療費は65歳から無料でした。三重県からわざわざ高田の息子さんのところに住民票を移してくる方がいました。中曽根内閣の時に日本列島不沈空母と言い出して軍事費が増え無料だった老人医療が有料に。2人の子供を保育園に預けて働いていましたが保育料もどんどん上がっていききました。同僚の看護婦さんが当直をするのに子どもを知人に預けるのに一人4000円。当直手当は5000円。2人預けたら3000円は自分持ち。院内保育園保護者会を作って、保育環境の改善と保育料金の値上げ反対運動を行いました。

このまま黙って見ていたら、戦争の道に進んでしまう。初めて比例代表が導入された時、党の要請を受けて高田市から県議会議員に立候補したのが政治を志したきっかけでした。

老人医療費の無償化の時も、保育料の時も同和地域だけが軽減されていて同じ願いに分断が持ち込まれました。その時に東洋医学友の会の会長さんが、「年取って足腰いたいのはみんな同じや」と行政の分断を一蹴。一緒に力を合わせることで差別がなくなっていくと学びました。初めての選挙は見事落選。それでも現職に肉薄した戦いができたことで参議院選挙に出ることに。全県をくまなく回ったことはその後県会議議員になった時貴重な経験でした。



《パート 4》

私が働きながら子育てできたのは保育所や学童保育所のおかげでした。職場の院内保育所は産休明けから見てくれました。仕事が遅くなる時はお迎えを頼むと運転手さんが公立保育所に迎えに行って職場の保育所に連れてきてくれました。夕食は近くの食堂から配達。時間通りに仕事が終わるのが一番ですが、こんなサービスが普通にあればもっと楽に子育てできると思います。



夫は公務員で公立保育所の保父第1号で子育てのよきパートナーでした。組合が忙しくてあてにできず。



ご近所にずいぶん助けていただきました。初当選は北葛城郡区（当時7町）から32歳でした。公約した中南和の救命救急センター設置を初当選の日上田知事に要望、毎議会で取り上げました。新聞で交通事故の死亡記事を切り抜くのが日課。

たらいまわしされて大阪に運ばれています。ついに知事は医大に作ると答弁しましたが、ほかの議員に質問に答える形でした。実現できたことは声を上げ続ければ政治は変わるという大きな確信になりました。北葛城郡は定数が4から5に1増、今井さんは大丈夫論がばらまかれて、7町でどこでも2番か3番でしたが、ここという地元がなく合計したら少し足りずに落選しました。復帰するのに8年かかりました。この間香芝が市になり私は広陵町にまた引っ越し。当選した時にはこんなに喜んでもらえることがあったんだと熱いものがこみ上げてきました。

《パート 5》

2期目の時、奈良県が同和対策事業で中小企業高度化資金を貸したままいちども請求していない融資があることが発覚しました。当時、同和問題はタブー視され、質問されても答えられないと執拗に質問の取り下げの圧力がありました。8年かけて戻ってきたのは県民が聞きたいことを聞くため。答えがないならそれが答えでいいですと頑張りました。

このような特別待遇を行へば、いつまでも差別はなくならないと10年間裁判をたたかい。貸したものは返すという当たり前の判決が出ました。戦争も貧乏も差別もない社会を作りたいが私の願い。母は6人兄弟の末っ子で2歳で父親が病死、祖母は一人で6人を育て3男が戦争で亡くなりました。白木の箱しか返ってこなかった日、祖母が納戸に入って声を押し殺して泣いていたと母から聞きました。

92歳で亡くなるまで息子が生きていと信じていました。なぜ女性が愛する人を万歳して送り出せたのかが不思議でしたが、当時は戦争反対も言えず女性に選挙権もない時代と後から知りました。

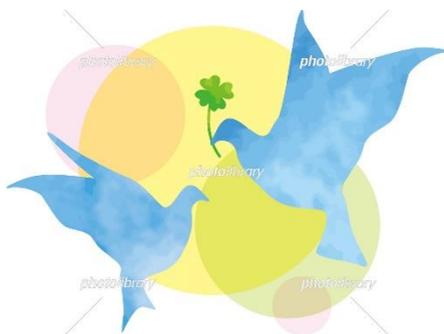
戦後婦人参政権ができた時祖母は「戦争させないため選挙に行こう」と村中を回ったそうです。



いま敵基地攻撃能力を持つなどと言いだし、軍事費を増やす戦争への道に進もうとしています。

ウクライナでは普通の暮らしに突然ミサイルが飛んできたように日本も他国に同じことをしようとしています。

殺すな殺されるな。みんなで生きるために力を合わせる時。温かい政治と一緒に作りましょう。



県政に春を！

